

2015年5月13日

## 私の出会った40年前のメヒコと現在の姿(1)

作成：株式会社メヒココンサルティング

ハリスコ州貿易投資日本事務所 瀧澤 寿美雄氏

発行：みずほ銀行 直投支援部

1975年初夏、私は生まれて初めて飛行機に乗ってメヒコに向かった。今から40年前で、日墨交換留学生の選抜試験に運よく合格し、大学三年時に10か月間メキシコ州の州都であるトルーカに住む機会に恵まれた。当時としては画期的な大型の国費留学制度で、日本からは経団連加盟の企業から推薦研修生70名と一般公募枠の学生30名の計100名がメヒコに旅立った。月額奨学金は当時3,000ペソ、日本円で75,000円支給され、三食付きの一般家庭のホームステイで暮らすことになった。

40年前のメヒコと現在のメキシコはどう違うのか、どこが変わっていないのかは興味の尽きないテーマである。親日国、治安の悪さ、不衛生、食習慣、時間に無頓着など話題には事欠かないが、メキシコをまだ知らない方に40年前のメヒコと今のメキシコを対比して話すことは、これからビジネスでメヒコと関わり合いを持つ方にとっては役に立つのではないかと思う。

まず初めにお断りしておきたいのは、ここでは国名をメキシコとは言わず、スペイン語読みの「メヒコ」と表すこと。私が最も影響を受けたメキシコに関する本の一つに「メヒコと日本人 第三世界で考える」(石田雄著 1973年 東大出版会)があるが、この本のタイトルに「メヒコ」の表記があったのが強烈であったので、国名をメヒコに統一する。

### 日本航空からAeroMexico、そして全日空も

さて、日本とメキシコ間を結ぶ航空路から当時と現在の比較から始めよう。メヒコと日本の時差は15時間(冬季)であるが、当時は日本航空が成田とメキシコシティをバンクーバー経由で就航し、給油時間を含めて15時間ほどかかった。唯一の直行便で、週二便しかなくいつも満席であった。私は幸運にも、初めて乗った飛行機がこの初の就航便に搭乗することができ、しかも美しいスチュワーデスを目の前にする座席であったのを記憶している。

現在では、アエロメヒコが週4便、ドリームライナーといわれるボーイング787の新鋭機で成田とメキシコシティを直行便で結んでいて快適である。行きはノンストップで12時間ほどだが、帰りはモンテレイ経由で給油し、待ち時間があるため17時間ほどかかるのが

難点である。シティーを夜遅く出発し、モンテレイは真夜中で、成田到着が翌日早朝になる。

メヒコ政府は日本人観光客をさらに増やすため日本政府に航空会社の乗り入れを要請中であるが、日本の航空会社が検討中とのことだが具体的な発表はまだない。全日空は2015年6月より成田―ヒューストン線を新規就航することになっていて、メヒコ中央高原地区に行き来する日本人ビジネスマンにとっては利便性が増すため、直行便が就航するまではこの便でヒューストンまで行き、コードシェアしているユナイテッドに乗り換え、中央高原に日系企業が多数進出しているレオン、アグアスカリエンテス、ケレタロやグアダハラにスムーズに行けることになる。

ちなみに、メキシコシティにあった日本航空系列のホテル日航メキシコは、2012年ハイアットリージェンシーに名称変更されたのは、非常に残念なことである。全日空がメヒコに乗り入れた場合、ホテルも経営してくれると日本人としてはうれしい。全日空のメヒコをゲートウェイとする中南米戦略に注目したい。

### 親日国メヒコの「片思い」から「両思い」の友好国に

二番目に、メヒコの親日度は変わらないのかどうかを見てみよう。メヒコが本格的に日本にラブコールを送ったのは、実は1972年まで遡る。当時の大統領であったエチェベリア大統領の訪日が発表され、6週間連続で「グラン・ハボン（大日本）」と題する日本を賛美する特集番組がテレビで報道された。この大統領の訪日には政治的な大きな意味合いがあった。すなわち、反米感情の投射としての「親日」である。米国への経済的依存があまりにも大きく、また、1845年メヒコ領であったテキサスが米国に合併された歴史を持つメキシコ人の米国に対する感情は複雑である。米国にはヒスパニックが多数住んでいるが、そのマジョリティーはメキシコ系アメリカ人で、彼らに言わせると故郷に帰ってきただけであるという感覚である。

メヒコ政府のこの大胆な外交政策は、結局のところ、親日国メヒコの日本に対する「片思い」でしかなかった。これを証明する数値がある。日本人とメキシコ人を100名ずつ交換する留学制度は1970年に始まったわけだが、その応募の競争率を見れば明らかである。日本は2倍、メヒコはなんと10倍であった。日本はメヒコと戦火を交えていないうえ、歴史的な友好関係があるためメキシコ人は日本及び日本人を美化して考える傾向がある。40年前は、日本人を見れば東洋人イコール中国人という捉え方で「チーノ」と言われたものだが、今では日本人とビジネス交流のあるメキシコ人に、「東洋人の中で日本人をすぐに見分けられるか」と聞くと、「なかでも洗練されているのは日本人だ。私は日本人が好きだ」と答える。メキシコ人の日本贔屓は今でも変わっていない。

両国の友好度の深さを象徴する話をしよう。在日メキシコ大使館の所在地は永田町で、斜め向かいに都立日比谷高校があり、実は、大使官邸の真裏には衆議院議員議長と参議院議員議長公邸がある。欧米先進国の在日大使館が港区に多くあることを考えると、この立地は破格の扱いである。

一方、在メキシコ日本大使館はどこにあるかといえば、シティーの目抜き通りである Paseo de la Reforma の一等地にあり、道路を挟んで反対側は米国大使館である。中央高原に日本企業が多数進出し、なかでもその数が最も多いグアナフアト州の最大都市であるレオンに来年初めには日本総領事館が開設されるということである。

日本とメヒコの友好関係は一層深まり、メヒコの「片思い」から両国の「両思い」の相思相愛の域に達しつつあるかもしれない。

参考文献 (日本語文献)

書名・記事タイトル	著作・執筆・編集	訳	出版社団体	出版年
『メヒコと日本人』	石田雄		東京大学出版会	一九七三年
「アステカ貴族の青年がみた支倉使節」『図書』林屋永吉			岩波書店	(一九七五年八月号)
『十九世紀におけるメキシコと日本』	マリアエレナ・オタ・ミシマ	古屋英男訳	霞が関出版	一九七八年
『メキシコの外交政策・メキシコの關係経緯』	モデスト・セアラ・バスケス	藤田宏郎訳	晃洋書房	一九八〇年
『芭蕉の詩学』(『ユリイカ』)	オクタビオ・パス	野谷文昭訳	青土社	一九八〇年
『ディアス・コバルピアス日本旅行記』	ディアス・コバルピアス	大垣貴志郎・坂東省二共訳	雄松堂出版	一九八三年
『近代メキシコ日本關係史』	エンリーケ・コルテス	古屋英男・米田博美・三好勝共訳	現代企画室	一九八八年
『日墨交流史』	日墨協会・日墨交流編集委員会(編)		P M C 出版	一九九〇年
『北斎を愛したメキシコ詩人ホセ・ファン・タブラーダの日本趣味』 田辺厚子			たはこと城の博物館(発行)	一九九三年
『日本身聞記』ロドリゴ・デ・ビベロ 一六〇九年」J十中南米学術調査プロジェクト編	大垣貴志郎監訳		岩波書店	(一九九七年七月号)
「メキシコへ最初に渡った日本人たち」『図書』林屋永吉			中央公論新社	二〇〇一年
『マヤ神話 ポポル・ヴフ』	国本伊代		新評論	二〇〇二年
『現代メキシコ 詩集』	アウレリオ・アシアイン／鼓直／細野豊編訳		土曜美術社出版販売	二〇〇四年
『メキシコの百年 1810-1910 権力者の列伝』 エンリーケ・クラウセ	大垣貴志郎訳		現代企画室	二〇〇四年
『物語 メキシコの歴史 太陽の国の英雄たち』 大垣貴志郎			中公新書	二〇〇八年